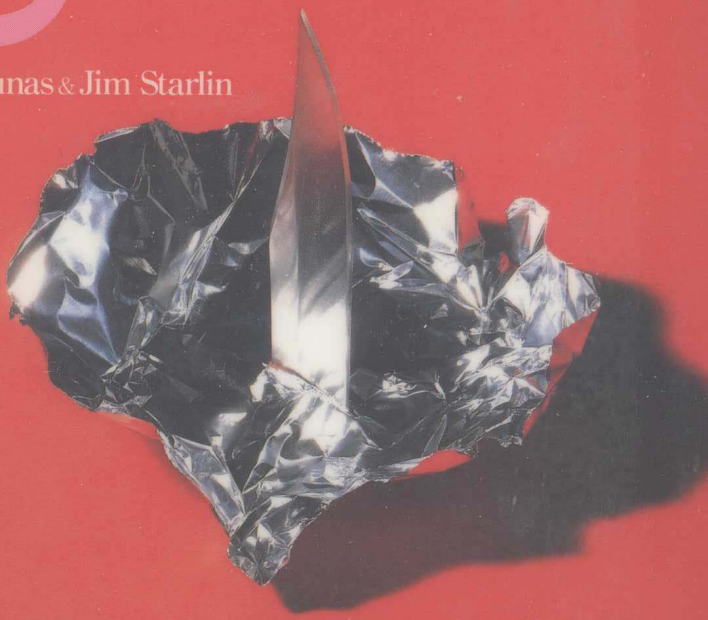
サイコメトリック キラー

THINNING THE PREDATORS

Daina Graziunas & Jim Starlin



早川書房

サイコメトリック・キラー

THINNING THE PREDATORS

Daina Graziunas & Jon Stan

江苏工业学院图书馆
藏书章

Hayakawa Novels

訳者略歴　1949年生，慶応義塾大学文学部史学科卒，英米文学翻訳家　訳書『勇者の代償』ジャック・ヒギンズ，『リービング・ラスベガス』ジョン・オブライエン他多数

サイコメトリック・キラー

1997年4月20日　初版印刷
1997年4月30日　初版発行

著　者　ダイナ・グラシウナス
　　ジム・スターリン
訳　者　小林理子（こばやし あやこ）
発行者　早川　浩

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　03－3252－3111（大代表）
振替　00160－3－47799

印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります
ISBN4-15-208072-8 C0097
Printed and bound in Japan

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

サイコメトリック・キラー

日本語版翻訳権独占
早　川　書　房
© 1997 Hayakawa Publishing, Inc.

THINNING THE PREDATORS

by

Daina Graziunas and Jim Starlin

Copyright © 1996 by
Daina Graziunas and Jim Starlin

Translated by
Ayako Kobayashi
First published 1997 in Japan by
Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan by
direct arrangement with
Baror International, Inc.
Armonk, New York, New York, U. S. A.
in association with
Scovil Chichak Galen Literary Agency.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

わたしたちの友人すべてに捧げる。
とりわけ、
メアリー・ジョー・ダフィ、ドッティ・ハワード、ロン・マルス、
この三人の援助と励ましには、とくに感謝を捧げたい。

第一部　輪廻転生

われわれの悲しい現状では、つぎの生への期待だけが唯一の慰めである。

――マルチン・ルター

1

一九九六年六月二十三日
ネヴァダ州インディアンスプリングズ近く

アイラ・レヴィットがはっと目を覚ましたとき、あたりは暗くなりかけていた。気分は最悪だった。六フィート五インチの彼の体は、湿った地面に横たわっていた。頭がずきずき痛むうえに、左腕を骨折したらしい。指を動かそうとしてみて、間違いなく折れているのがわかった。くそ、なんて因果な仕事なんだ！　やつらなど、ただ引き受けて人に押しつけるだけではないか。やつら？　ぼやいても仕方ない。

満月になろうとする月が、アイラの苦境を照らし出した。だが、横になったまま状況を思い出そうとしているあいだも、頭のなかのティンパニは鳴りつづける。まず、男が家の陰から出てきた。次に、頭を狙って荒々しく振りあげられた角材がちらっと見えた。打撃を防ごうと本能的に腕をあげたのは覚えている。記憶はそこで途絶えた。

アイラはぎこちなく上半身を起こし、シャツのボタンを外すと、折れた腕を慎重に袖から抜いて、内側にすべりこませた。「今夜はだめだよ、ジョゼフィーヌ。割れるように頭が痛いんだ」と、声に出してつぶやく。その言葉があまりに場違いだったので、思わず笑いそうになった。だが、角材の男がまだ近くにひそんでいるかもしれないことを考え、笑いを喉の奥にひっこめる。うんざりすることに、頭のなかでは〈ラ・マルセイエーズ〉のコーラスがいましも山場にさしかかっていた。「おれもすっかりパンチドランカーだな、まったく。とにかく、立ちあがらなくちゃ話にならん。いい年こいて、こんな仕事はもう無理だ」

二十八年間の現場経験を持つFBI捜査官、アイラ・レヴィットは、ふらふらしながら立ちあがった。懐中電灯と銃がなくなっていた。慎重に、インディアンスプリングズ警察のベーコン巡査とゴディン巡査を残してきたところまで戻っていく。ふたりが彼をここまで案内してくれたのは、アイラのデジタル時計によれば、ほんの三

十分ほどまえだ。タイメックスの時計。ガツンと一撃、変わらずチクタク。ベーコンとゴディンも時計みたいにしぶとければいいのだが。そもそも、まだ生きているだろうか。

生きてはいた。幸福そうではなかった。ふたりとも上着の下は裸で、木に寄りかかってすわっていた。制服のシャツはたたんで即席の包帯にして、右腿に巻いてある。月光にふたりのリヴォルヴァーが光っていた。「大丈夫だ」アイラは近づきながらいった。「おれだ。レヴィットだ」

「レヴィット！　いったいどこにいやがったんだ？」

怒っている警官がベーコンなのかゴディンなのか、アイラには思い出せなかった。この日の午後に初めて会った相手だし、いま現在、彼の頭の働きは絶好調とはとてもいいがたい。頭のなかではらっぱが激しく鳴り響き、ときおり、歌が聞こえる。〝さあ、祖国の若者たちよ……〟。

「角材で頭を殴られた」アイラは弱々しく答えた。今回の失態がすべて自分の責任になりそうな悪い予感がした。

「こっちはなにがあった？」

「ベーコンとおれは、あんたが帰ってくるのを待っていたんだ。あんたと別れたところでそのままな。銃声がした。おれたちはあんたの掩護に走った。ここまできたところで、誰かが近づいてくる音がした。おれたちは隠れた。誰だかはわからないが、男は家のほうからきて、おれたちの名前を呼んだ。苦しそうな声だった。あんたにちがいないと思ったんで、藪から出たとたん、びっくり仰天さ。懐中電灯をまともに照らされて、目が眩んだ。次の瞬間には、ふたりとも脚に弾を食らってたってわけだ」

アイラはかがんで、青白い月光に照らされたゴディンの怪我を見た。「では、そいつはきみたちの名前を知っていたんだな？」

ゴディンはこみあげてくる反感を隠そうともしなかった。初対面のときからすでに感じられた反感だ。「ああ、どうして知っていたんだろうね。あんた、なんか隠してないか？」

地元警察と連邦警察の対立。組織間の昔ながらの憎しみと疑心がなくなる日はこない。

「落ち着くんだ。味方同士じゃないか」アイラは悲しそうな笑みを浮かべていった。「だから、最後の質問には答えもしないし、感想もいわん。現実的に見て、おれた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ちはふたりとも、路地裏で男らしく決着がつけられる状態じゃないからな。だろう？　第一な、ゴディン……きみは見るからに強そうなタイプじゃないって、誰かにいわれたことはないか？」

アイラ・レヴィットは柄にもなく猫背になって、自分の年齢と、ゴディンとのちょっとしたやり合いの両方を重たく感じながら、ベーコン巡査のほうへゆっくり歩いていき、脚の怪我を注意深く調べた。じつに見事な撃ち方だ。狙撃手にメダルを進呈すべきだ。ゴディンの場合もベーコンの場合も、銃弾は右腿の側面寄りに命中している。相手を最小限の傷で動けなくさせるものだ。手際がいい。傷は小さく、充分かつ効果的。礼儀正しいとさえいえる。シャツにじむ血のしみから、弾の射入口と射出口があるのがわかる。銃弾は脚を貫通したのだ。神よ、小さな厚意に感謝します。少なくとも、弾道特性からは、このふたりを動けなくしたのがアイラの銃だと証明するのは無理だ。だが、長い目で見れば、そんなことはさしたる問題ではない。アイラは真実を知っているし、けして忘れることはない。彼はベーコン巡査の怒りに満ちた目を見つめた。「応援はもう呼んだんだろうな？」

ベーコンはアイラをにらみつけた。「どうして呼べるか、教えてもらいたいもんだ。車を奪われちまったってのに！」

「なんだって？」アイラは笑いをこらえるのがやっとだった。くそったれ、またやったのか。

「パトカーを盗みやがったんだよ！　耳が聞こえないのか？　おれたちに弾をぶちこんだあと、やつは車のほうにまわった。こっちもやけになって、暗がりに向けて何発か撃ったが、まぐれ当たりってわけにゃいかなかった。すぐに、エンジンがかかって車が去っていく音が聞こえた。それからずっと、ここにすわっているのさ。いったいどうすりゃいいのかって思いながらな」

アイラは立ちあがり、自分がきたほうを見た。「あの家に戻って助けを呼んでくる。銃と懐中電灯を貸してくれ」

ゴディン巡査はなにもいわずに、むっつりとした顔で要求されたものを差しだした。アイラもむっつりと受けとり、背を向けていきかけたが、ほんの二、三歩いったところで、肩越しに振り返った。「撃ったやつが藪をかきわけていったとき、どんな音がした？」

「音？……そうそう、忘れてたよ」

アイラのところからは、ベーコン巡査の表情は見えな

かったが、声の響きから顔を輝かせているのがわかった。
「脚が悪かったみたいだ」ベーコンがいった。「たぶん、片足を引きずっていたんだろう。やつが誰なのか知っているのか？」
「確信はない。いいか、じっとしているんだ。すぐに戻る」

アイラはキーファーの家に引き返した。懐中電灯を手に持ち、ゴディンの銃はベルトに差した。笑みがまだ口の端に残っている。角材で腕と頭を殴られたときに、銃をぶっ放した記憶が漠然とある。

暗い農家につくと、アイラは自分が待ち伏せをしていた角に戻った。懐中電灯でさっと照らしてみる。しかし、キシュカの奥深くですでに知っていたことを確認しただけだった。彼の拳銃と懐中電灯は消えている。くそ、なんてこった！

キシュカは、こんな仕事ではとても役に立つ。イディッシュ語で、胆力という意味だ。もしくは、本能、底力、直感。いずれにしろ、信頼するにたるものだ。自分に囁きかける〝小さな声〟などよりはずっと正確だし、なによりもキシュカは嘘をつかない。

借り物の懐中電灯が照らしだしたものを見て、アイラは少しだけ気が軽くなった。血が草を濡らしている。アイラの血ではない。ベーコンとゴディンはこんなに遠くまではきていないから、残る可能性はひとつ。彼が反射的に撃った弾は狙った的にあたったのだ。アイラはこの男をつかまえるために、首都ワシントンからはるばる旅してきた。獲物は逃げたものの、まったくの無傷というわけではない。デイヴィッド・ヴァンデマークへの容赦ない追跡はまだ成果をあげていないが、今回は少なくとも、獲物に小さなしるしをつけた。冷たい自己満足にすぎないかもしれないが、ときには手にいれられるもので満足するしかないのだ。

アイラは懐中電灯を消し、不器用にズボンのポケットに押しこむと、銃をベルトから抜いた。本気で必要だとは思わなかったが、用もない危険を招くジョン・ウェイン流は願いさげだった。アイラにいわせれば、年金をだましとられたければマッチョに振る舞え、なのだ。そのうえ、今夜はもう失策はおかせない。この家に銃も抜かずにはいっていくのは、愚かなだけだ。ここは、大量殺人犯の家なのだから。連続殺人鬼――。そうでなければ、デイヴィッド・ヴァンデマークがここへくるはずがない。

玄関ドアが開いているのを見て、アイラはそっとなかにはいった。玄関ホールの暗闇に立ち、身動きせずに耳を澄ます。

そばだてた耳に届いてきたのは、かすかな連続音だけだった――水の滴る音だ。ポト、ポト、ポト、ポト、ポト。

それ以外はしんと静まりかえり、まるで納骨堂のようだ。アイラは不用意な連想にすぐ後悔した。それでなくとも閉所恐怖症に襲われているというのに、よけいにひどくなった。彼は銃を構え、音をたてずに少しずつホールを進んでいった。水滴の音が確実に近づいてくる。ポト、ポト、ポト。

ホールの端の部屋をのぞいてみた。窓からほのかに射す月光で台所なのがわかったが、それ以上細かいところは見分けられない。発光スイッチの弱い光が、奥の裏口際の壁に不吉な輝きを投げている。水の滴る音はずっとはっきりしてきた。たぶん台所の流しにある古い皿洗い機だろう、とアイラは思った。そう思っても、その音は緊張した神経を耐えがたく軋ませた。ポト、ポト、ポト。だがおかしい。水が食器に落ちる音とはちがう。

アイラは部屋のなかにすべるようにはいっていった。その体格からは信じられないくらい軽々とした足取りだった。彼は一瞬立ち止まり、もう一度家のどこかで物音がしないかと耳を澄ませた。水滴の音以外はなにも聞こえてこない。ポト、ポト、ポト。

ふいに、いやな音は流しからきているのではないことに気づいた。部屋の奥の暗い隅から聞こえてくる。アイラは薄暗がりに目をこらした。あまりにじっと見つめたので、頭がずきずきしてくる。音の源を見きわめるには、台所の明かりか懐中電灯をつけるかしかない。片腕しか利かないので、懐中電灯を使うとなると、銃を下におかなければならない。ちょっと具合が悪いどころの話ではない。反対に、台所の明かりのスイッチなら、アイラが立っているところからほんの数インチ左側にある。

ポト、ポト、ポト。

アイラは痛む目をこすり、ひざを曲げ、背中を壁につけながら左ににじり寄って、肩胛骨がスイッチにあたるまで進んだ。そのまま姿勢をまっすぐ起こして、スイッチを上に突きあげる。光あれ。閉じたまぶたの向こう側に、光が満ちた。目を開けたアイラはまぶしさにまばたきし、それから、おそろしい真実にまばたきした。

ポト、ポト、ポト、ポト、ポト、ポト。

血が、台所のテーブルから床の黒い合成樹脂のシートに滴り落ちている。目の前の光景のあまりの凄惨さに、しばらくは声も出せず、なにも考えられないまま、ただ見つめているしかなかった。それから衝撃が一気に襲ってきて、喉が詰まった。胃が反乱を起こし、手短な出口を探している。抑えろ。ここではだめだ。殺人があったばかりの現場にきあわせるなんて、最悪もいいところだ。自分に〝なぜ〟と問いかけるのはこんなときだった。なぜこんなどうしようもない仕事を選んでしまったのか？ちくしょう、こんなひどい光景は見たことがない。

アイラは、テーブルに裸で横たわる十代の少年の、身の毛のよだつような姿にゆっくりと背を向け、なにを見るでもなく天井をにらんだ。もっとも、テーブルに載っているのは、少年の残骸としかいえないものだったが。

ポト、ポト、ポト、ポト、ポト。

規則的に滴る血の音が、アイラ自身の心臓の鼓動と結びつく。鼓動はドラムのいっせい連打のように耳のなかで脈打っている。彼は銃を持った手で頭をさすって、うずきを消そうとした。平らでひんやりした拳銃が、右のこめかみに心地よかった。部屋は狭かった。狭すぎて、どこもかしこも臭いが漂う。少年の四肢は無惨に切り落とされていた。大きなステンレスのバケツがふたつ、床に置いてある。ひとつには、まだ筋肉繊維の垂れさがる血だらけの骨が、無造作に詰めこまれてあふれそうになっている。もうひとつのバケツに詰まっているのは、切りわけた肉らしい。

状況を完全には把握できぬまま、アイラは陰惨な情景を見つめた。しばらくして、台所のテーブルに工業用の肉ひき機が留めつけてあるのに気づいた。その気味悪い存在が、アイラの感情をおおっていた目隠しを一気に引き裂いた。いきなりバンドエイドを剝ぎとったように。

「ああ……なんてこった……」

アイラは体が揺れるのを感じた。ふいにめまいがし、冷蔵庫に寄りかかって体を支える。が、冷蔵庫は部屋の向こう側にあった。では、これはいったい何なんだ？振り返ってみると、縦型の冷凍庫だった。普通、ステーキ用の極上肉などを大量に保存しておくためのものだ。

冷凍庫のドアを厳粛といっていいほどの慎重さで開けて、なかに積んであるこぎれいな包みを見た。それから、同じように静かな厳粛さでドアを閉めた。「変態野郎めが。こんなに若い命を……」アイラはもう一度、切り刻

まれた哀れな少年に目をやった。必死で抵抗していたのに、大きな涙が一粒、悲しく湧きあがり、静かに頬からあごに伝っていった。

涙を拭きながら床に目を落とすと、血だらけの足跡が台所のテーブルから続いているのが見えた。「ちくしょうめ」アイラは静かにいった。「できるなら、おれが落としまえをつけてやる」彼は足跡を追って台所を出た。

足跡は居間に続いていた。そこには男がひとり、背中をマントルピースの片側にもたせかけて、床にすわっていた。膝の上にショットガンが載っている。額の中央には、小さな弾痕。血が細く男の顔を伝い落ちて、白いシャツと肉屋のエプロンに染みついた少年の血と混ざっていた。暖炉の上の銃架は空だ。デイヴィッド・ヴァンデマークは、この新たな獲物を殺すまえに、五分五分以上のチャンスを相手に与えている。フェアプレイの精神こそがデイヴィッドのトレードマークであり、サインともいえた。アイラは肩越しに振り返って、ショットガンの弾が粉々にした壁を見た。これまで何度となく浮かんだ疑問が、ふたたびアイラをとらえた。ブレードランナーを地でいく私設警察官デイヴィッド・ヴァンデマークは、重い死の願望を抱えてロシアンルーレットをしているのか。それとも、過剰なほどのフェアプレイ精神は、そくぞくするような心理的興奮を苛烈に追求し、復讐の喜びを高めるための手段なのだろうか？

アイラは、悔しさも哀れみも感じずに死体を見おろした。これが、この家の持ち主のエルモア・キーファーなのだろう。デイヴィッド・ヴァンデマークとアイラ・レヴィットのふたりを、今夜ネヴァダ州のこの場所に引き寄せたのは、キーファーの秘密の行為だった。このさびれた地方ではここ一年半ほどのあいだに、男女の別なくティーンエージャーが何人も姿を消していた。州警察は、子供たちはおそらく州間高速道路でヒッチハイクをしてどこかに消えたのだろうと結論づけた。だが、行方不明事件が実際は連続殺人犯の仕業だとしたら……。ヴァンデマークがこの謎に興味を持たぬわけがないことが、アイラにはわかっていた。

そこで、アイラ・レヴィットは自分の勘にしたがい、罠を仕掛けようと一週間まえにインディアンスプリングズへやってきた。今日の朝早くたまたま行き当たったガソリンスタンドの店員が、ヴァンデマークとどことなく特徴が一致する男がエルモア・キーファーについて尋ねていったのを覚えていた。それでこの農場の家にきたの

だが、一歩遅かった。

温かく情にあふれた感情的な人間としてのアイラ・レヴィットは、状況がこんなふうに展開したことを喜んでいる。一方、法の遵守を誓った連邦捜査官としてのアイラ・レヴィットは、いらいらして、またしても獲物を網にいれそこなった失望に、煮え返る思いだった。

アイラはデイヴィッド・ヴァンデマークを七年間追いつづけている。今夜までは直接顔を合わせたこともなかった男と、七年越しの愛憎関係を続けてきた。アイラは怪我をした腕を見た。

「念願のご対面をはたしたと思ったら、腕を折られちまった。間抜けもいいとこだ！」

アイラは寝室で電話を見つけ、救急車と応援を要請すると、正面ポーチにふらふらと歩いていき、階段に腰をおろして機動部隊の到着を待った。夜の涼しいそよ風が、殺人現場のよどんだ臭いのあとでは気持ちがいい。アイラは深く息を吸って、夜の澄んだ空気を肺いっぱいに満たした。だが、それでも悪臭は鼻に残った。

今回は、あと少しのところだった。空手でワシントンに帰り、ヴァンデマークの件でまた失敗の報告書を書くのは惨めだ。できるならば、デイヴィッド・ヴァンデマークには、彼よりも長生きしてほしかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com